

若者コミュニケーション論としてのディスコ空間

佐々木 花 江

人間社会形成に重要な役割を果たすコミュニケーションにメディアが及ぼす影響は今日強まっており、コミュニケーション能力が低下したと言われる若者たちは特にこのメディア状況に大きな影響を受けて人間形成を行っている。彼らのコミュニケーション状況の今日を知りこれからを占うために、若者と深い関わりのあるディスコ空間というメディアの実態を探る。

ディスコ空間は1960年代に欧米から輸入されて以来日本でも徐々に浸透し、現在ではすっかり定着した感がある。そして、時代を超えて一貫した特徴として、最新の外来文化・風俗をとり入れ、それを体感できるメディアであること、そのような最新の流行を追うことが重要な要件であるために一般にその内容や場所などの変化が激しく、寿命が短いこと、外来文化を真似して最新の流行を自分のファッションやライフスタイルにまで取り入れようとする傾向の強い若者が多く集まること、などが挙げられる。

このディスコ空間は一般に良くないイメージを持つ人が多い。そして評論家達は、ディスコ空間を祭りの現代形だと捉えている。細かく言えば、

ディスコ空間は、若者達が青春の喪失感に駆り立てられて集まる場所である、とか、性の社交場であるとか、人生を享楽欲に任せて生きる人達の不安と恐怖をぶつける空間だとかいった捉え方があり、また純粋に踊る楽しみに浸れる空間だという見方もできる。また大都市に特有であったり、外国人に象徴されたりもする。

ディスコと一口に言ってもその中身はさまざまだが、内部における人と人とのコミュニケーションは、共通して「観る－観られる」、「出会う」、「いちやつく」、「一体感を得る」の4要素に分けられると思われる。また、嗜好・年齢層・国籍その他からある傾向を持った棲み分けがみられる。さらに、空間を彩るモノとして、日本人の多い空間の場合、煙草の存在が目立つ。また、麻薬の類が確認されることもあり、そういった犯罪の空間になるめんもある。

このような諸様相を呈するディスコ空間において若者は時を費やし、自らの「ひとづくり」を行っている。このことが、どのような社会形成に関わるのか、これらの若者がどのようにこれからの社会を支えていく存在になるのか、注目したい。

微地形単位で見たカンアオイの分布を規定する谷の物質移動

—加住北丘陵、切欠地区における検討—

佐藤 寛 子

加住丘陵切欠地区におけるカントウカンアオイの分布を調べ、その分布を規定する要因を、微地形スケールでの物質移動と対応させて、考察した。

本研究により分かったことは、カントウカンアオイは微地形に対応して分布しており、その拡大過程には、地表面の物質の安定性、移動性が大きく影響を及ぼしていることである。

調査地内のカントウカンアオイの分布を個体ごとに調べたところ、その分布には粗密があり、葉の枚数・大きさとの関係から、次の三つのパターンにタイプ分けされた。

- ①大きな個体が、粗に分布しているところ。
- ②小さな個体が密に分布しているところ。
- ③大きな個体と小さな個体とが混じって、粗に分布しているところ。

カンアオイの分布にこのように違いを及ぼす要因としては、表層の物質移動が考えられ、物質移動がなく安定しているところでは、カンアオイは地下茎を太くのばし、栄養による分枝をしながら、大きな個体に成長すること。

また、谷壁等の物質移動の激しいところでは、カンアオイごとの個体の葉の枚数は少なく、ほと

んど1～2枚で、それは、地形の変化にともない個体の地下茎が切れることによって二個体が増えていると推測された。

このようにして表土の移動にともない斜面下方

に移動した個体は、谷底に到達して、子孫を残す個体になるようで、このことを考えるとカンアオイの移動速度はさらに検討される必要があるだろう。

観光開発と地域住民

—宮崎・日南海岸リゾート構想を事例として—

佐藤 亮子

1988年7月、総合保養地域整備法の第1号として、「宮崎・日南海岸リゾート構想」が承認され、本構想の一部として開設された総合リゾート施設「シーガイア」はすでに1993年7月に第1期オープン、1994年10月に完全オープンしている。本稿は、「シーガイア」建設及び開業をめぐる地域住民への影響を、最近の統計や地域住民の声を参考として探り、最後に目指すべき観光開発の在り方を考えるものである。

最近の宮崎市及び宮崎県観光客数、宿泊客数、宮崎空港利用者数、観光客の観光地別行き先のデータによると、宮崎の観光業は1993年に多少上昇傾向に傾き、1994年には大きな伸びを示している。おそらく「シーガイア」の開設が一因と考えられる。さらに、事業主体であるフェニックスリゾート株式会社は新しく2000人を雇い入れており、「シーガイア」は宮崎市に一定の経済効果を与えていると言えるだろう。しかし一方で、「シーガイア」が他の観光地への客を奪う結果となった事実も読み取れる。

「シーガイア」開設、特にそれに伴う約10万本松林の伐採に対する反対運動参加者の主張によると、住民は本開発によって次のような影響を受けたという。まず第一に、祖先から受け継いだ貴重な歴史文化遺産を失ったこと。第2に、宮崎市民や隣接市町村民が小・中学校の遠足や運動会、子供の遊び場、高齢者の憩いの場、ピクニック、菌茸・松露採集、森林浴などに利用してきた親しみ

のある土地を失ったこと。第3に白砂青松の美しい自然景観を失ったこと。第4に防潮・防風保安林を伐採され、特に津波に対する不安が増したことである。さらにその他の開発に対する反対理由として、国有財産法や森林法の解釈の問題、生態系の破壊、環境アセスメントの欠陥、地域住民の意向を無視しているということあげている。

一般住民へのアンケート調査によれば、本開発は宮崎の活性化のため必要なものであるが、全く問題がない訳ではなく、特に松林伐採による津波、強風への不安は大きいという考えが主流のようである。

以上のようにさまざまな影響や問題点があげられるが、開発の過程での事業者と住民との意見交換が行われなかったことがこれらの問題を大きくしていると言え、根底にある問題点と言えるだろう。環境アセスメントの手続きの一部として住民による意見書の提出、公聴会の開催などを制度的、実質的に確立して行く必要があると思われる。また、環境アセスメントについても言えることであるが、開発が大規模なものであるほど自治体が確固とした立場をもって、事業者と住民の間に立つ必要があるだろう。

リゾート開発はさまざまな方面に影響をもたらすため、広い視野から進めるべきものである。あらゆる立場の人々が、より良い回答を見つけるべく、在るべき観光開発の姿を模索していく必要があると考える。